



1

(第一～九九号)

初夏の朝露をふんでバラの虫取りをするその小さな若葉にふれるのは、幼児の手の様な感触で、誠にさわやかである。それも私が植えた樹と、バラ園が植えてくれた樹では自らのしさが異なる。私が植えた、ということだけで自分の子供の手にふれている様な気がするのだから不思議である。

私の家では門の上のアーチから玄関にかけて蔓バラをはわしてあるが、その十本位が二十日程の間に順番に美しく咲いているが、咲きはじめるのは毎年全く同じ順序である。今年のバラは十日程遅れた様だったが、やはり気候がおそかった為だったろう。同じ理由でプリントも咲きはじめるのが遅れたが。バラの花の様におそくとも同じ順序で同じ花が咲くのなら心静かだが。プリントは遅れたら遅れっぱなし、下手をすると花も咲かずに終るのだから恐ろしい。

寒くとも、雨が長くとも、バラの花を待つ心静けさで夏物の商売が出来ないものだろうか。自然に逆われないことがその第一歩になるう。

(32・6・21 第一号)

私の友人の甥が登山仲間の死体をさがす為に谷川岳にのぼって突然の事故でその前途ある生涯を同じ山に終った。その青年は優秀なる成績で有名な大学を卒業し、或る火災保険会社に入社後の勤務も抜群であったらしい。

御通夜から御葬式と会社の人々の務め様には真実がこもっていて、遺族の方も深く心に銘じられた様であった。半月程して会社に御挨拶に行かれてみると、その青年の机はもとのままにしてあって、その上にはたくさんの花が美しくかざられてあったそうである。よく聞くと、それどころか毎朝他の人と一緒に生前の彼の湯呑で御茶もくばられていたそうである。

花は同じ職場の人が毎朝入れかわり持つてくる。その青年は入社後三年にしかならなかったが、いやな仕事は務めて自分がやった。明朝で真実でみんなに非常な好感を持たれていた。ドライと言われる現代にこんなウエットな花を咲かすのはよほど彼が立派だったのだらう。こんな花はめったに咲くものではない。

(32・7・1 第二号)

最近では浜村美智子の「バナナ・ポート」程若い人の人気を集めたものはなからうが、私などあの歌のどこがいいのか分らない。写真で見ると身体はたしかに美しいが、グラマールとしてでなく、歌手としてはよくもあの歌で飯が食えるものだと感じる。勿論こんな感心をしているのは私などの感覚が現実の動きについていないためであらう。世の中は変わってきた。私たちの仕事もオートメーション時代になって、その変化がバナナ・ポート位でないことは理窟の上ではよく承知していると思っている。しかし、若い人がバナナ・ポートを知っているのは理窟の上だけではない。既に自分のものにしていて、あの感覚が即行動であり即生活になっている。私がオートメーション時代の変化を知っていると言い得る為にはそれが行動や生活に結びつかねばならない。現実の動きについて行っていないのは、歌どころか自分自身の仕事に対してである。バナナ・ポートどころの話ではない。

(32・7・11 第三号)

国洋電機の上野常務が日本生産性本部のアメリカ視察員としての旅行から帰ってきての私に対する第一の報告は、アメリカは機械でなく人間を重視する経済機構であると思ったということであった。私などもアメリカと言うとチャップリンのモーダンタイムズが諷刺する人間が機械に追ひ廻されている図を考える。この諷刺は諷刺であるとしても、少くとも機械万能だと思っていた。ジェネラル・ラヂオという会社は国洋電機が生産している電気計測器のメーカーとしてアメリカで一番の会社である。この会社には上野常務も特に心が深かったので、数日間見学させてもらった。驚いたことにはここでは全く流れ作業をしていない。部品を特別大きな作業台にずらりとならべて、一人が組立から試験まで全部やってしまう。この結果非常に製品がよくなったそうである。この会社の社長にあなたは何を任務としておられるかを問ねたところ、私の仕事はいい人間を集めることだけだという返事であったそうである。

(32・7・21 第四号)

街を走ってる自動車で一九五〇年以前の車はもう古くさくさくなってきた。一九四〇年より古いのは骨董品になっている。之に関連して自らの年を考えるが、国洋の幹部は新しくて一九二〇年以前、古いのは一九一〇年以前だから相当古くさくなっているのが、当り前の話だ。私達は封建的な主人番頭丁稚の訓練をうけてきたのだが、さて自分が経営の責任を持つてみると終戦の大変革で民主的な経営時代になり、分らぬ乍らも之に対処してきた。あの山この山越えて今日迄はやってきたものの、問屋の明日は嵐を前にひかえた暗澹さである。之をのりこえる為が一番必要なことは我々の頭が若々しいことだろう。

古い頭をクリーニングしてもう一度使いものになる訓練を国洋の幹部が受けることにした。八月五日から二十五日迄、毎夜六時から十時迄、なかなか猛訓練だ。夏は暑い、夜は疲れる。だけど、生きるためには勉強しなければならぬ。こう考えるだけで私には若々しさが生まれてくる。

弊社は壹千万円の子算内で事務を機械化する事にした。我々の営業の結果を即刻知りた
いのが最初の目的である。この件に就いて会議した時の有力な反対意見は機械化の為にそ
の数字を一日か二日早く知ることが之程大きな金をかける程必要なことだろうか、という
疑問であった。

確かにそう言われて見ると早く分った営業の数字が直ちに利用出来る程確かな頭も持た
ないし、又そんな立派な組織も持っていない。従って、ただ早く数字を知っていたずらに
満足するにすぎない危険はあるようだ。しかし近代がスピード時代である様に近代経営も
スピードを失っては考えられぬ。私は営業の数字が即刻出ることによって、働いている我
我が鞭打たれること、即ちこの数字がそのもとである我々を逆にスピード化してくれるこ
とを期待する。

事務の機械化は事務だけの能率化を目的とせず、営業をやっている我々自身の能率化
を目標とすべきであるとの会議の結論になった。

毎晩五時半から四時間ずつ十日間続いた管理者訓練もようやく終わった。歳のせい、肉体的にはいささか疲れた。之は睡眠時間が少なくなる事が、暑い時だけにこたえたのである。弊社の幹部には、私より年輩の人が多いのだから、その人達にとっては定めし苦しう十日間だったと、その熱意に心より感銘している。

苦しくはあったが訓練の効果は当初想像していた位のものではなかった。この訓練をうけずに経営していた事は、海図なくして大洋を航海する以上に危険だったと思った。常識とでも言いたい程簡単なことであるが、それ等を系統的に美事にまとめあげた力には感心する。

話はいたって簡単である。しかし色々失敗した経験のある者でないと具体的にはよく解らないのではないかと思つた。我々は今日迄主として勤で管理をしてきたのであるが、之からは共通のルールが出来た訳であるから、会社の運営も会議も必ずスピーデイになる筈だと楽しみにしている。

私が死ぬということは知っている。しかしいずれは死ぬのであって明日は必ず生きてい
ると思いきんでいる。死が現実的な問題となっていないので私は私の働きを信用しようと
する。自分の働きを信用するものにはえてして無理が出てくるものらしい。

私は健康を害して死ぬかも知れないと本気で考えたことがあったが、その時よく解った
ことは私の働きではどうにもならないことであり、一番いらいらしたことは、家族の将来
や仕事のことであった。仕事に就いては私が今まで自分の後任者をどれだけの熱意をもっ
て育ててきたかの反省であり、しかもその答は誠に心いたいものであった。この気持を忘
れずにいたら私も責任者としてもう少し立派になれるにちがいない。

三十代で私のやってきた通りの働き方が四十半ばをすぎた私には駄目なこともしばしば
反省する。自分の力の弱さを本当に知ることが人間の力を強めるのかも知れない。死を忘
れないことが私にとっては必要だ。

(32・9・1 第八号)

昭和二十年の四月の或る夜、日比谷公会堂で日響の演奏会をきいた。東京は半ば焼野ヶ原で、何時空襲があるか分らない緊迫の中での音楽が私の人生では一番美しいものだったことを記憶する。その前夜に大空襲があったので楽団も不揃いなら御客も僅かだったが、その殆んどが若い人々であった。何がいつ起るか分らぬさなかで、静かに音楽をきこうとする純粹さを貴いと信じていたあの頃の私の若さがなつかしい。商人としてこの若さは失いたくない。アブレだ、カリブソだ、と若い人を馬鹿になどしていると、世の中は変わり時代は進み、その結果はこの若い人々が時代の主人公になっているのである。

若い人はその強い感受性によって世の中の動きや流行の変化を本能的に消化する。之に追いつく為には色んな努力が必要であるが、先ず明日に夢を持つことが之を一番助けるだろう。そして、日頃接触する御客が年寄りに傾いていたら自らの仕事がかうまくいってないのだと反省する。

あまりに若くして責任のある地位につくことは不幸なことだ。私はそれだけの能力も無いのに二十代で責任を持たされた為その頃の毎日は爪先をたてて歩いている様な苦しみだった。若い時はその馬力で或る程度の乱暴をやり、相당한無茶も通してこそ人間も仕事も伸びるのだから、責任者になると考えが安全第一になり、何よりも先ず失敗のないことを目標としなければならぬので人間も仕事も小さく纏ってしまうものだ。

私はときどき若い時のことを考えるがもう少し自由な立場で働いていられたらどんなに幸福だったろうと残念に思う。

御得意先の御令息様を見ていると、学校を出て数年どこかで見習を終って自分の店に帰ってこられると、えてしてあまりにも早く責任のある仕事をされることが多い。こんな場合には、出来れば成る可く長く自由に責任なく働かせた方が結果はいい様だ。

息子だから早く仕事をさせたいという愛情が結果としてかえって不幸を与えることになっている。